正しい書き方はただ一つ

1961 年の 5 月、「朝日ジャーナル」誌の座談会「漢字をめぐる諸問題」で、わたしはお茶の水女子大学の波多野完治博士と話し合ったことがあります。

「わたしは当用漢字で表わせるようなことばは、小学校の一年生のはじめから、漢字で教えます。なぜこんなことを始めたかというと、どこの国でも、ことばの表記は二本建てではない。ことばのつづりがどんなにむずかしくても、子ども向きのやさしいものをつくって教える、ということはしない。日本だけが、はじめ、『がっこう』と教えておいて、あとで、『学校』と教える。そこにむだがありはしないか。これが、石井方式実施の動機です」

とわたしが語ったのに対して、波多野博士は、

「それは重要な問題で、三つの点に注意する必要があると思う」

と前おきして、

「第一は、学習、あるいは教授体系における正書法主義ということです。これは石井さんの教授体系の中で、もっとも正しい考え方だと思う。一年生の教科書を正書法的に書き直して、それをつねに子どもに見せることによって、漢字の習得率が上がった、ということは、大きな成果で、カリキュラムの編成に相当考えて、採り入れていかなければいけない問題じゃないか」と大賛成の意を表わしてくれました。